

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第214集

宮の上遺跡群

宮の上遺跡Ⅴ

長野県佐久市横和宮の上遺跡発掘調査報告書

2013

佐久市教育委員会

例 言

- 1 本書は株式会社シナノによる工場新築工事に伴う宮の上遺跡Vの発掘調査報告書である。
- 2 事業主体者 株式会社シナノ
- 3 調査主体者 佐久市教育委員会
- 4 遺跡名及び発掘調査所在地 宮の上遺跡群 宮の上遺跡V (YMMV)
佐久市横和304-1
- 5 調査担当者 久保 浩一郎
- 6 本書の編集・執筆は久保が行った。
- 7 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

- 1 遺構の略称は以下のとおりである。
H - 竪穴住居址 P - ピット
- 2 遺構断面図の標高は遺構ごとに統一し、スケールバー上に値を示した。
- 3 遺構の計測値は以下の値である。



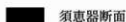
床面積



- 4 スクリーントーンでの表示は以下のとおりである。



地山



須恵器断面

黒色処理・石器磨面・焼土範囲



灰軸

- 5 遺物の実測図番号と写真番号は対応し、特に記載のないものは縮尺1/4で掲載した。
- 6 本書で示した方位は真北であり、座標値は世界測地系に準拠している。
- 7 遺物観察表における()は推定値を、[]は残存値を示す。

目 次

例言	第II章 遺跡の位置と環境	2
凡例	第1節 地理的環境	2
目次	第2節 歴史的環境	3
第I章 発掘調査の経緯	第3節 基本層序	4
第1節 発掘調査の経緯	第III章 遺構と遺物	7
第2節 調査組織	参考文献	
第3節 調査日誌	写真図版	
第4節 遺構・遺物の概要	抄録	

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査の経緯

宮の上遺跡群宮の上遺跡は、佐久市横和に所在する縄文時代から平安時代までの複合遺跡である。北側の湯川と南側の千曲川・滑津川に挟まれた東西に長い台地上に位置し、標高679m内外を測る。

今回、遺跡内において株式会社シナノによる社屋新築工事が計画されたため、遺構の確認を目的とした試掘調査を平成24年11月5日に実施した。その結果、平安時代の竪穴住居址2軒が検出された。保護協議の結果、遺跡の保存が不可能な建物部分について記録保存を目的とする発掘調査を行うこととなった。発掘調査は、重機により表土を除去した後、調査区内に4mグリッドを設置した。その後人力により遺構確認面の精査・遺構検出を行い、遺構掘削・写真撮影・実測図作成作業を順次行った。

第 2 節 調査組織

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	土屋 盛夫
事務局	社会教育部長	伊藤 明弘 (平成24年度)	矢野 光宏 (平成25年度)
	文化財課長	吉澤 隆 (平成24年度)	三石 宗一 (平成25年度)
	文化財調査係長	三石 宗一 (平成24年度)	比田井 清美 (平成25年度)
	文化財調査係	須藤 隆司	小林 眞寿 羽毛田 卓也 (平成24年度)
		富沢 一明	上原 学 並木 節子 (平成24年度)
		神津 一明	久保 浩一郎
嘱託職員	林 幸彦		
調査主任	佐々木 宗昭 (平成24年度)	森泉 かよ子	
調査担当者	久保 浩一郎		
調査員	赤羽根 篤	阿部 和人	飯塚 一男 飯森 成英 井出 孝子
	河原田 三男	木内 修一	小林 妙子 神津 千春 坂井 一夫
	里見 理生	高橋 章	土屋 邦子 中条 勝良 橋詰 勝子
	橋詰 信子	林 まゆみ	堀籠 保子 柳澤 孝子

第 3 節 調査日誌

平成24年12月5日～	バックホウにより表土掘削を開始する。
12月7日	調査区内にグリッド杭を打設。
12月10日	遺構確認面を精査し、遺構検出作業を行う。
12月11日～	遺構掘削、遺構写真撮影、遺構断面図・平面図作成を順次行う。
12月18日	調査区内を清掃し、全景写真撮影を行う。
12月19日～	調査区平面図等作成作業を行う。
12月25日	機材を撤去し、現場作業を終了する。
12月26日～	室内作業開始。遺物洗浄、注記、接合、実測等を順次行う。
平成25年～9月	報告書を刊行し、すべての作業を終了する。

第 4 節 遺構・遺物の概要

遺構	竪穴住居址 2軒 (平安時代)、ピット 1基
遺物	土師器 (坏・椀・甕・蓋・鉢)、須恵器 (坏・甕)、灰釉陶器 (椀・皿)、石製品 (磨石・敲石)、鉄製品 (釘・牽引金具)

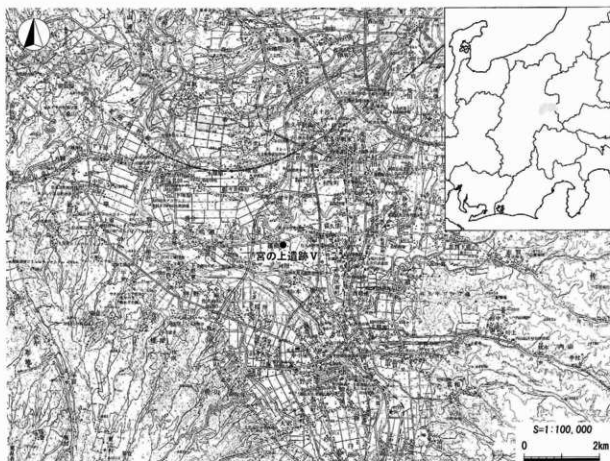
第II章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

佐久市は長野県中央東端、群馬県に接し四方を山地・台地に囲まれた標高700m程度の盆地内に位置する。佐久平と呼ばれるこの盆地は、東に荒船山・物見山・寄石山・八風山などを主峰とする佐久山地、北に浅間山、南に蓼科山・八ヶ岳を望み、その中央には周囲の山々から流れる支流を集めながら千曲川が北流する。

佐久平の地質を外観すると、千曲川により南北に二分される。南側は蓼科・八ヶ岳山麓からの小河川により形成された小規模な扇状地及び千曲川の沖積低地が広がり、河床礫層と沖積粘土層が主体となる。一方北側は浅間山麓の緩やかな台地で、浅間山の火山噴出物である第一軽石流が厚く堆積している。この堆積物が河川の浸食をうけて形成された浸食谷、いわゆる「田切り地形」が特徴的に発達している。

宮の上遺跡は佐久平のほぼ中央に位置する佐久市横和に所在する。浅間山麓から延びる台地の南端部にあたり、佐久市街地を西流する湯川が軽石流の台地を浸食して形成した河岸段丘上に位置する。標高約680mの段丘は、北側には湯川、南側には千曲川・滑津川が西流し、河川との比高差は20～30mを測る。当該段丘上は軽石流上に軽石流二次堆積物である砂礫層、いわゆる“湯川層”が堆積しており、宮の上遺跡もこの砂礫層を基盤層としている。

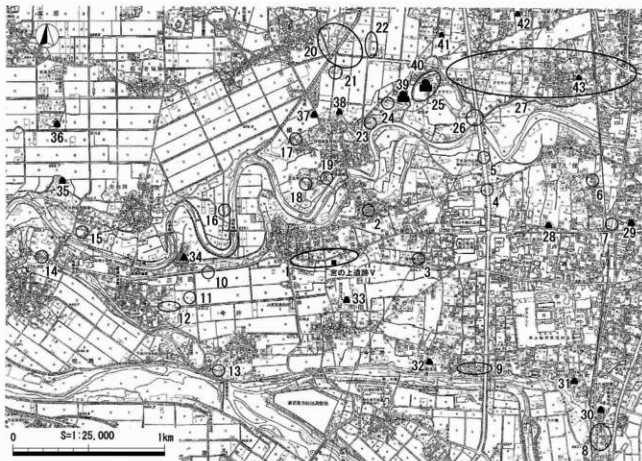


第1図 宮の上遺跡V位置図

第2節 歴史的環境

ここでは宮の上遺跡周辺の発掘調査成果から、歴史的環境を概観したい。第2図に周辺遺跡を示したが、遺跡範囲は発掘調査地点を示しており、包蔵地範囲とは異なる。

本遺跡周辺の台地は、約13,000年前の浅間軽石流及び軽石流二次堆積物により構成されているため、旧石器時代の遺跡は皆無である。縄文時代の遺跡も希薄であり、遺物が散見される程度で集落跡などは発見されていない。しかし寺畑遺跡(4)からは佐久市内で唯一、縄文時代草創期の爪形土器片が出土しており注目される。弥生時代中期後半になると本格的な居住が認められるようになり、湯川沿岸部では遺跡が急増する。特に西一里塚遺跡(20)から岩村田遺跡群(27)一帯は住居が密集しており、地域の拠点を成すような大集落が存在したと考えられる。古墳時代になると集落は一時減少するが、中期後半以降再び増加に転じる。このころ台地上に古墳が築かれるようになり、北西の久保古墳群からは多量の形象埴輪が、東一本柳古墳からは金銅製の馬具が出土している。奈良・平安時代においても弥生・古墳時代と同様の地点に集落が営まれ、岩村田遺跡群(27)では300棟以上の住居が発見されている。湯川左岸でも、本遺跡のほか、根々井芝宮遺跡(2)、寺畑遺跡(4)、仲田遺跡(5)、今井西原遺跡(11)、下原遺跡(12)などで住居址が確認されており、広く集落が営まれていたことがわかる。仲田遺跡では白銅鏡(花卉双蝶八花鏡)や「寺」の文字が墨書された土器など、寺院の存在を示唆するような遺物が出土している。本遺跡では、過去4次の調査が行われており、平安時代の竪穴住居址や掘立柱建物址などが検出されている(第4図)。中世では湯川右岸に根々井氏館跡(18)、根々井東原館跡(23)、滑津川右岸には深堀城跡(8)や今井城跡(13)などの城館跡が存在する。



第2図 宮の上遺跡周辺遺跡分布図

番号	遺跡名	縄文時代	弥生時代	古墳時代	奈良・平安時代	中世
1	宮の上遺跡群宮の上遺跡					
2	宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡					
3	宮の上遺跡群割地遺跡					
4	寺畑遺跡					
5	仲田遺跡					
6	猿久保屋敷跡遺跡					
7	香屋前遺跡群香屋前遺跡					
8	深堀城跡					
9	梨の木遺跡					
10	寄塚遺跡群寄塚遺跡					
11	今井西原遺跡					
12	白山遺跡群下原遺跡					
13	今井城跡					
14	上平遺跡群寺中遺跡					
15	大和田遺跡群川原端遺跡					
16	森平遺跡					
17	日向屋敷遺跡					
18	根々井氏館跡					
19	根々井居屋敷遺跡					
20	西一里塚遺跡群西一里塚遺跡					
21	西一里塚遺跡群餅田遺跡					
22	西一里塚遺跡群樋橋遺跡					
23	根々井東原跡					
24	鳴澤遺跡群五里田遺跡					
25	北西の久保遺跡					
26	中西の久保遺跡					
27	岩村田遺跡群					

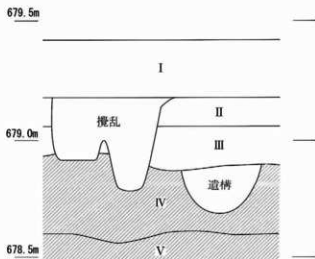
遺物のみ確認されている時期 発掘調査等で遺構・遺物が確認されている時期

第1表 宮の上遺跡周辺遺跡消長表

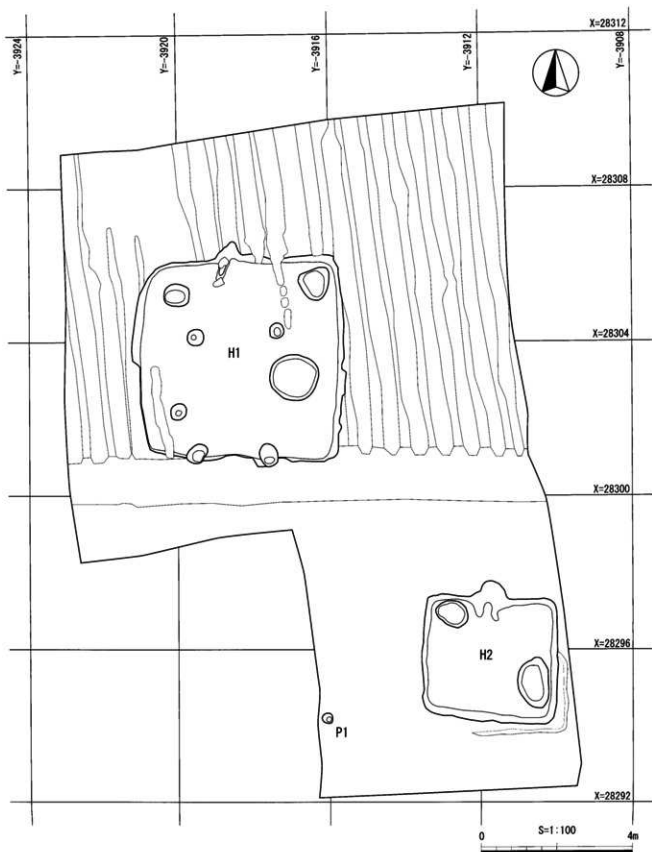
第3節 基本層序

本調査区は湯川の河岸段丘上に位置し、佐久市北部一帯を被覆する浅間第一軽石流の二次堆積物が地山となる。本調査で確認された土層を以下のⅠ～Ⅴ層に大別する。

- Ⅰ層 褐灰色を呈する耕作土である。
- Ⅱ層 灰褐色を呈する旧表土である。Ⅱ層上面から南北方向に延びる溝状の攪乱が認められる。
- Ⅲ層 灰褐色を呈する客土である。
- Ⅳ層 明黄褐色を呈する砂質土であり、浅間第一軽石流の二次堆積により形成されたと考えられる地山である。Ⅳ層上面で遺構が確認できる。
- Ⅴ層 明黄褐色を呈する砂である。



第3図 基本層序模式図



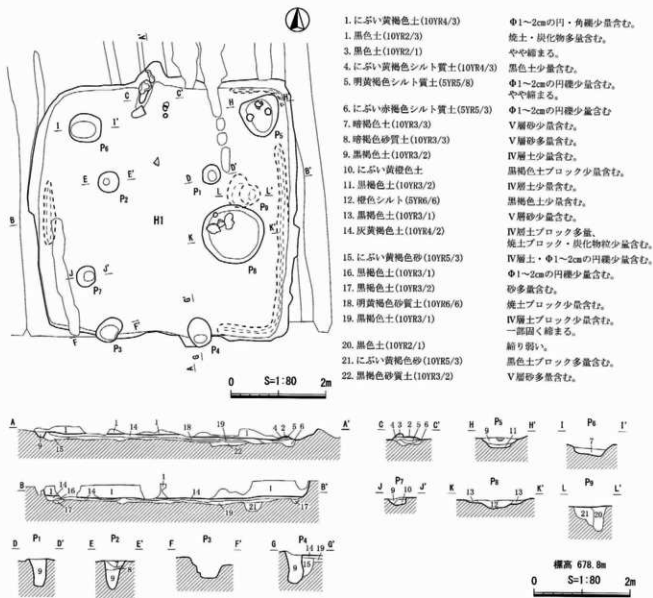
第5図 宮の上遺跡V発掘調査区

第三章 遺構と遺物

H1号住居址 調査区中央に位置し、南北5.16m、東西5.30m、床面積25.8㎡を測る方形の住居址である。主軸はN-1°-Wで、ほぼ南北方向である。検出面から床面までは30cm程度で、埋土はにぶい黄褐色を呈する自然堆積土である。床面は全面が硬質で、壁溝は認められず、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は焼土ブロックや炭化物を含む灰黄褐色土(14)層により形成されるが、14層下位には一部が硬化した黒褐色土(19)層が認められる。また14層下位に一部壁溝が検出されることから、床の張り替えが行われたと考えられる。住居内では掘方を含め9基のピットが検出された。主柱穴はP1~P4の4基で、南側のP3・P4は側壁に接している。北東隅に位置するPsからは、須恵器環(8)、土師器環(31)・碗(37)、土師器小型甕(17)などが出土した。

カマドは北側中央に配置される。大部分が畚状の溝に破壊されており、西側袖部が一部残存するのみである。袖部は粘質のシルト質土と自然礫で構築されている。

遺物は須恵器環・甕、土師器環・碗・甕・鉢、鉄製品の釘・学引金具が出土した(第7図1~46)。食膳具である環が多く、中でも内面黒色処理が施された土師器が主体となる。



第6図 H1号住居址遺構実測図

1～9は須恵器である。1～8は坏で、底部は小さく、体部は直線的に立上る。底部はすべて回転糸切りが用いられ、未調整である。いずれも焼成は不良でにぶい黄褐色～褐色を呈する。9は耳は残存していないが凸帯文付四耳壺の肩部と考えられる。外面にタタキ目が認められ、焼成は不良でにぶい黄褐色を呈する。

10～43は土師器である。10～15は坏で、外面はロクロナデが施され、底部はすべて回転糸切りで未調整である。内面はロクロナデが施されるものとミガキが施されるものがあり、15は放射状の暗文が施される。16～18は甕である。16は口縁部にヨコナデ、体部外面にヘラケズリが施されるいわゆる武蔵甕である。17・18はロクロ甕で、17は底部回転糸切り後不定方向のナデが施される。また外面底部脇の一部にヘラケズリも施される。18は器壁が厚く、体部外面には縦方向のヘラケズリが施される。

19～43は内面黒色処理が施された土師器である。19～36は坏で、いずれも外面はロクロナデ、内面はミガキが施される。ミガキは見込みから体部にかけては放射状に、口縁部は横方向に施される。底部はすべて回転糸切りで、25・26のみ底部脇をヘラケズリにより調整する。37～40は椀で、調整は坏同様であり、底部外面の高台内には回転糸切り痕を留める。41は鉢である。42・43は坏ないし椀で、外面に墨書が認められる。

44～46は鉄製品である。44・45は角釘である。46は字引金具である。

これらの遺物から、H1号住居址は9世紀後半の所産と考えられる。

H2号住居址 調査区南側に位置し、南北2.79m、東西3.19m、床面積8.4㎡を測る方形の住居址である。南東部は擾乱により一部削平されている。主軸はN-3°-Eで、ほぼ南北方向である。検出面から床面までは40cm程度で、埋土は黒褐色砂質土の自然堆積土である。床面はやや硬質である。壁溝は認められず、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは2基認められるが、柱穴は確認できなかった。カマドは北側中央に配置される。煙道および天井部は崩落しており、袖の一部が依存するのみである。袖部はシルト質土と自然礫で構築されている。

遺物は須恵器坏、土師器坏・蓋・椀・甕・鉢、灰軸陶器碗・皿、石器が出土した(第8図47～67)。

47～49は須恵器の坏である。底部は小さく、体部は直線的に立上る。49はやや深い。いずれも外面底部は回転糸切りで、未調整である。

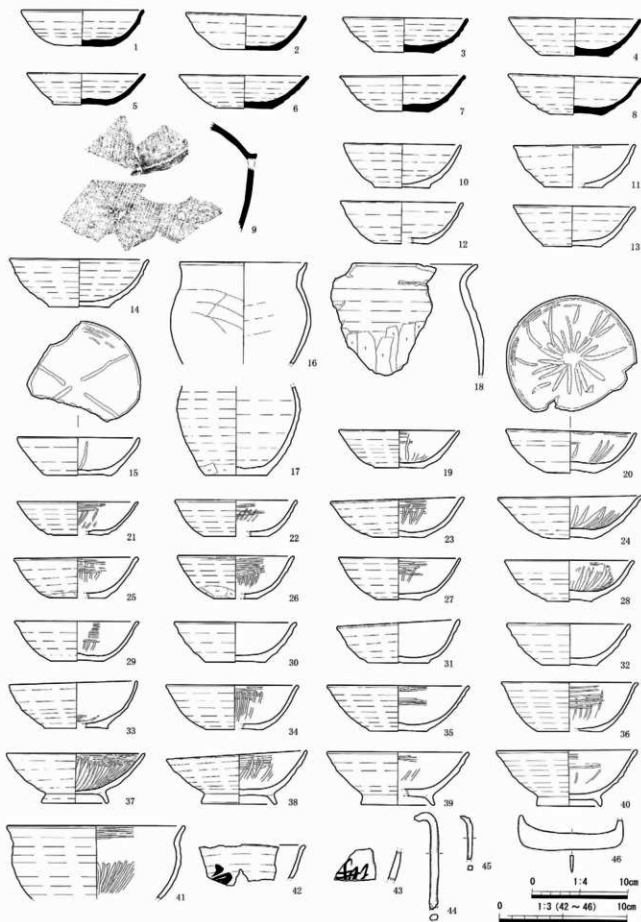
50～62は土師器である。50・51は坏で、須恵器同様体部は直線的に立上る。外面底部は回転糸切りで、未調整である。51は内面に放射状の暗文が施され、外面には「良」と考えられる墨書が認められる。52～55は甕で、いずれも内外面にロクロナデが施されるロクロ甕である。56～61は内面黒色処理が施された土師器である。56～58は坏で、いずれも外面はロクロナデ、内面はミガキが施される。ミガキは見込みから体部にかけては放射状に、口縁部は横方向に施される。底部はすべて回転糸切りで、未調整である。59・60は椀で、調整は坏同様である。59の外面には「志」の墨書が施される。60の高台は外面中央が稜をなし、内面は内湾し端部が尖る断面三日月形を呈する。高台内には回転糸切り痕を留める。体部は内湾気味に立上り、口縁部はわずかに外反する。61は鉢、62は蓋である。

63～65は灰軸陶器である。63・64は椀で、体部の張りは弱く、口縁部がわずかに外反する。体部内外面にハケ塗りにより灰軸が施される。64の高台は断面三日月状を呈する。65は皿で、断面三日月状の高台から直線的に開いて立上る。体部内外面にハケ塗りにより灰軸が施される。

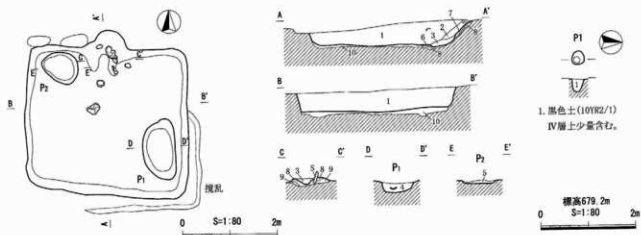
66・67は石器である。66は敲石で、上部を欠損している。67は磨石である。

これらの遺物から、H2号住居址は9世紀後半の所産と考えられる。

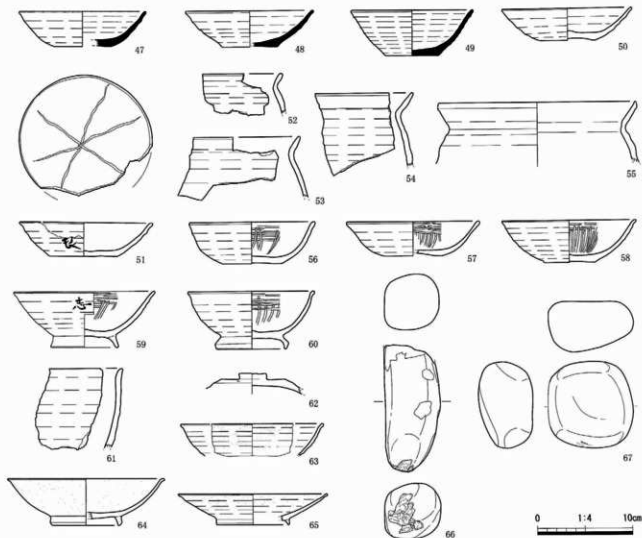
P1 調査区南側、H2号住居址の西側に位置する。長軸0.29m、短軸0.26m、深さ0.27mを測る円形のピットである。埋土は黒色を呈し、地山であるIV層土を少量含む自然堆積土である。遺物は出土しなかった。編属時期及びその性格は不明である。



第7图 H1号住居址遗物实测图



- | | | | |
|--------------------|------------------|----------------------|---------------|
| 1. 黒褐色砂質土(10YR3/2) | Φ1~2cmの円・角礫少量含む。 | 6. 黒褐色土(10YR3/1) | 焼土ブロック少量含む。 |
| 2. 黒褐色砂質土(10YR3/2) | 焼土ブロック少量含む。 | 7. 橙色粘質土(7.5YR5/6) | 固く締まる。 |
| 3. 黒褐色砂質土(10YR3/2) | 焼土・粘土ブロック多量含む。 | 8. 明赤褐色シルト質土(5YR5/8) | 黒褐色土少量含む。締まる。 |
| 4. 黒褐色土(10YR3/1) | IV層土ブロック少量含む。 | 9. 黒色土(10YR2/1) | IV層土少量含む。 |
| 5. 黒褐色砂質土(10YR3/1) | IV層土少量含む。 | 10. 黒褐色土(10YR3/1) | IV層土・V層砂少量含む。 |



第8図 H2号住居址遺構・遺物実測図 P1遺構実測図

番号	種類	器種	法量 (cm)			調整・文様		備考
			口径	底径	器高	調整・文様		
						内面	外面	
1	須恵器	坏	12.8	6.0	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り	内外面黒斑
2	須恵器	坏	12.5	6.0	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り	
3	須恵器	坏	13.0	6.2	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り	
4	須恵器	坏 (13.7)	7.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り		
5	須恵器	坏 (12.4)	5.7	3.3	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り		
6	須恵器	坏 (13.6)	5.9	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り		
7	須恵器	坏	13.1	(5.6)	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り	
8	須恵器	坏	13.9	5.5	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り	
9	須恵器	壺	—	—	[11.7]	ヨコナデ	タタキ	凸帯付四耳壺
10	土師器	坏 (12.2)	(5.8)	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り		
11	土師器	坏	12.6	6.1	4.5	ロクロナデ、口縁ミガキ	ロクロナデ、回転系切り	
12	土師器	坏 (12.8)	5.6	4.4	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り		
13	土師器	坏	12.7	6.0	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り	
14	土師器	坏 (14.7)	6.3	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り		
15	土師器	坏 (12.8)	6.9	4.0	ロクロナデ→ミガキ	ロクロナデ、回転系切り		
16	土師器	甕	13.3	—	[10.7]	口縁ヨコナデ、 体部ヘラケズリ	口縁ヨコナデ、 体部ヘラケズリ	
17	土師器	甕	—	6.6	[9.4]	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り、 底部外周ケズリ	
18	土師器	甕	—	—	[11.7]	ロクロナデ	ロクロナデ、ケズリ	
19	土師器	坏 (12.6)	5.2	4.0	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り		
20	土師器	坏	13.7	5.1	4.6	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り	
21	土師器	坏 (12.8)	(5.2)	3.5	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り		
22	土師器	坏 (12.8)	(6.8)	3.8	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り		
23	土師器	坏	13.9	5.4	4.0	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り	
24	土師器	坏	15.0	5.4	4.6	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り	
25	土師器	坏	13.0	5.8	4.2	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り、 底部外周ケズリ	
26	土師器	坏 (12.2)	(4.6)	4.5	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り、 底部外周ケズリ、口縁部ミガキ		
27	土師器	坏 (12.8)	4.6	4.4	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り		
28	土師器	坏 (13.3)	4.8	4.3	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り		
29	土師器	坏 (13.0)	(5.6)	4.2	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り		
30	土師器	坏 (13.4)	6.4	4.0	ロクロナデ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り		
31	土師器	坏	12.8	6.3	4.2	ロクロナデ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り	
32	土師器	坏 (12.7)	5.7	4.4	ロクロナデ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り		
33	土師器	坏 (13.4)	6.7	4.8	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り		
34	土師器	坏	13.9	6.0	4.7	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り	
35	土師器	坏 (14.8)	6.0	4.8	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り		
36	土師器	坏 (14.2)	(6.6)	5.2	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り		
37	土師器	椀	14.5	6.8	5.5	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り	
38	土師器	椀	14.7	7.8	5.4	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り	
39	土師器	椀 (14.8)	(7.6)	5.8	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り	付高台	
40	土師器	椀 (14.6)	6.6	6.1	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り	付高台	
41	土師器	鉢 (18.6)	—	[7.9]	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ		
42	土師器	坏	—	[2.7]	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	外面墨書	
43	土師器	坏	—	[2.5]	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	外面墨書	
番号	器種	法量 (cm)			備考			
		長さ	幅	厚さ				
44	角釘	[7.7]	[0.6]	[0.6]	[10.7]			
45	角釘	[3.4]	[0.5]	[0.5]	[1.9]			
46	牽引金	8.2	[2.8]	0.3	[14.5]			

第2表 H1号住居址遺物観察表

番号	種類	器種	法量 (cm)			調整・文様		備考
			口径	底径	器高	内面	外面	
47	須恵器	坏	(13.2)	(6.0)	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り	
48	須恵器	坏	(13.4)	(5.8)	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り	
49	須恵器	坏	(12.8)	(5.6)	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り	
50	土師器	坏	13.6	5.7	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ、回転系切り	付高台
51	土師器	坏	13.9	7.1	3.6	ミガキ(暗文)	ロクロナデ、回転系切り	墨書「良」?
52	土師器	甕	—	—	[4.2]	ナデ	ロクロナデ	
53	土師器	甕	—	—	[6.4]	ロクロナデ	ロクロナデ	
54	土師器	甕	—	—	[7.7]	ロクロナデ	ロクロナデ	
55	土師器	甕	(20.8)	—	[6.8]	ナデ	ロクロナデ	
56	土師器	坏	13.2	6.3	4.4	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り	
57	土師器	坏	(14.0)	(6.0)	3.6	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り	
58	土師器	坏	(14.0)	5.3	4.4	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り	
59	土師器	椀	(14.8)	6.8	5.9	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り	付高台 墨書「志」
60	土師器	椀	(13.3)	7.3	6.1	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、回転系切り	付高台
61	土師器	鉢	—	—	[8.5]	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	
62	土師器	蓋	—	2.6	[2.2]	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ、ケズリ	
63	灰釉陶器	椀	(15.0)	—	[3.5]	ロクロナデ→施釉	ロクロナデ、施釉	
64	灰釉陶器	椀	(16.4)	(7.0)	5.0	ロクロナデ→施釉	ロクロナデ、回転系切り、 施釉	付高台
65	灰釉陶器	皿	(15.8)	(7.6)	3.3	ロクロナデ→施釉	ロクロナデ、回転系切り、 施釉	付高台
番号	器種	法量 (cm)			備考			
		長さ	幅	厚さ	重量			
66	葎石	[13.6]	[5.9]	[6.0]	[665.3]	上部欠損		
67	磨石	9.0	9.2	5.5	726.1			

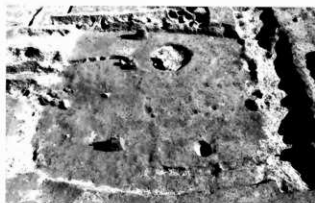
第3表 H2号住居址遺物観察表

参考文献

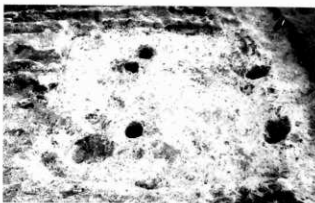
- 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1988 「宮の上遺跡群 宮の上」
『岩村田遺跡群菅田Ⅲ・新町Ⅲ 宮の上遺跡群宮の上 栗毛坂遺跡群中曾根 藤塚』
佐久埋蔵文化財センター調査報告書第10集
- 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1989 『宮の上遺跡群 宮の上遺跡Ⅴ』
佐久埋蔵文化財センター調査報告書第17集
- 佐久市土地開発公社・佐久市教育委員会 2005 『長土呂遺跡群 聖原』第5分冊
佐久市埋蔵文化財調査報告書第126集
- 笹沢 浩 1988 「古代の土器」『長野県史』考古資料編 全1巻(4)遺構・遺物
- 高村博文 1988 「佐久地方の平安時代土器編年試論」『薊沢・葛石』
佐久市埋蔵文化財センター調査報告書第13集
- 堤 隆 1987 「前田遺跡における奈良・平安時代の土器様相」『前田遺跡』御代田町教育委員会
- 堤 隆 1988 「十二遺跡における土器様相」『十二遺跡』御代田町教育委員会
- 堤 隆 1989 「根岸遺跡における土器様相」『根岸遺跡』御代田町教育委員会
- 鳥羽英継 「屋代遺跡群における古代の土器」1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』26
長野県土地開発公社・佐久市教育委員会 2001
『榛名平・坪の内遺跡群 榛名平遺跡』第Ⅲ分冊 古代律令編
佐久市埋蔵文化財調査報告書第84集
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』高志書院



宮の上遺跡V 調査区全景(西から)



H1完掘状況(西から)



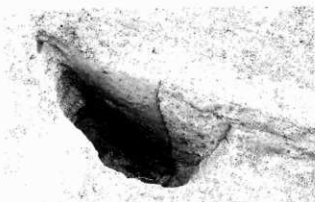
H1掘方完掘状況(西から)



H1カマド完掘状況(南から)



H1-P5遺物出土状況(南から)



H1-P4土層断面状況(東から)



H1-P4完掘状況(東から)



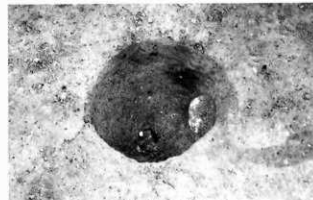
H2完掘状況(南から)



H2掘方完掘状況(南から)



H2カマド完掘状況(南から)



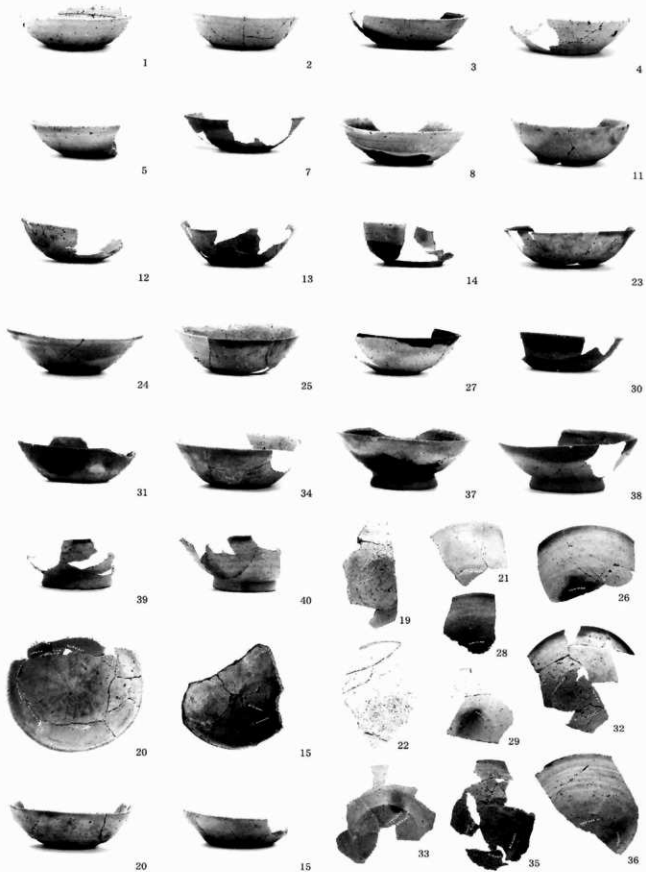
P1完掘状況(東から)



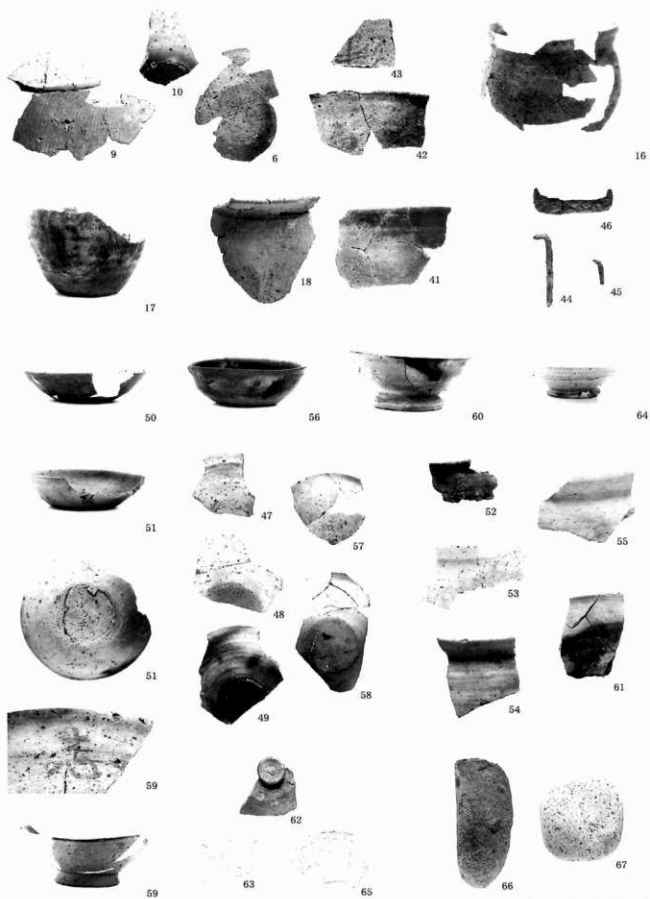
掘削作業風景



測量作業風景



図版四



報告書抄録

ふりがな	みやのうえいせきぐん みやのうえいせきご							
書名	宮の上遺跡群 宮の上遺跡V							
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第214集							
編著者名	久保 浩一郎							
編集機関	佐久市教育委員会 文化財課							
所在地	長野県佐久市志賀5953 Tel: 0267-68-7321 Fax: 0267-68-7323							
発行年月日	平成25年(2013)9月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市 町 村 遺跡番号		北 緯	東 経	調査期間	調 査 面 積 (㎡)	調 査 原 因
みやのうえい せきぐん みやのうえ いせきご 宮の上遺跡群 宮の上遺跡V	さくしよこわ 佐久市横和 304-1	20217	240	36° 15' 18"	138° 27' 22"	20121205 ～ 20121225	190	工場 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宮の上遺跡群 宮の上遺跡V	集落址	平安時代	竪穴住居址 1軒 ビット 1基	須 土 恵 灰 師 石 軸 鉄 陶 製 器 器 器 品				
要 約	佐久市街地を西流する湯川の左岸段丘上に位置する、弥生時代から平安時代を中心とした複合遺跡である。本調査区では平安時代(9世紀後半)と考えられる竪穴住居址2軒が検出された。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第214集

宮の上遺跡群 宮の上遺跡V

平成25年(2013)9月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

文化財課

〒385-0006 長野県佐久市志賀5953

Tel: 0267-68-7321

印刷所

キクハラインク有限公司

